

# 語代用の言い誤りと心的語彙部門の構造について

寺 尾 康

## 0. 序

もはや歴史的なとちり<sup>1)</sup>とってよいだろう、改めて紹介するまでもない例の「ミソラ発言」である。

言語学、特に言い誤り<sup>1)</sup>の集収、分析によほど興味を持っている人でない限り、「言い誤り」、「とちり」といった言葉を聞いてまず思い浮かべるのが「ミソラ発言」のようなある語の代りに別の語(しかし、何らかの関係がある)を用いてしまったために周囲の者の笑いの種になってしまった、という場面であろう。

しかし、心理言語学の観点に立てば、この種の言い誤りは以下の理由により、きわめて重要な研究上の意義を持っているように思われる。

- i) 文の企図(planning)から音声へ、という発話のメカニズム<sup>2)</sup>を考える時、舌のもつれ、調音の失敗という出力部門だけでは説明できないもっと深い段階、即ち発話メカニズムの出発点をなすとされる心的語彙部門(mental lexicon: 以下単に語彙部門)の内容(語彙の貯蔵のされ方等)、及び語彙選択の操作を解明する上で重要な情報を与えてくれる。例えば、「ミヤコ」と言うべきところを「ミソラ」と言ってしまったのはアナウンサーの意識の統制の及ばない段階での操作、したがって正常な発話だけを分析していたのでは推察が難しい操作を反映している実例であると考えられる。
- ii) 資料収集者の認知が容易で聴き間違い、記録間違いが少ない。したがって資料の信頼性が維持される。

本論では、このようなタイプの言い誤りを語代用エラー(word substitution error)と呼び、意図されていた語とそれにとって代わって侵入した語との間にある音声的、統語的な特徴について検討し、最後に最も微妙な扱いが必要と思われる意味的な特徴について若干の考察を試みる。

## 1. 資 料

本論で用いられる資料は、筆者が5年間にわたって収集した言い誤りの実例2300例中に見出された253例の語代用エラーである。収集方法としては、筆者が日常生活（テレビ、ラジオ、友人との会話等）の中で遭遇した言い誤りをできる限りその場で、カードに前後の文脈とともに写しとる、およびテレビ、ラジオ番組を録音しておいたものをテープ起こししてカードに記録する、という方法<sup>3)</sup>をとった。

## 2. 方 法

起こってしまった誤りは、ひとつの実例として記録され、それ以上の加工は許されないので本論では分析に際して特別な方法はとられていない。本論末に示したような、左端から実例（意図した語<intended: 以下I>、誤りで侵入してきた語<error: 以下E>）、および各観点からの検証の結果を記したリスト（語代用エラーリスト：以下WSリスト）を作成するというのが核となる方法である。

また、本論ではフロイトが1901年の著書『日常生活の精神病理学』で述べているような、ひとつひとつの言い誤りをとりあげ、なぜその誤りが起きたのかという原因を探り、話者の心理内容を追求してゆく、という方法はとらない。本論の主たる興味は発話メカニズムの中の語彙部門の解明にあるので、多くの実例を集めた上で、その一般的傾向を手がかりにしてゆく。

## 3. 結 果 — WSリスト —

### 3.1. ソースのある誤り

まず予備的な分類として、総数253例の語代用エラーを、誤りが起こった前後にそのソース（侵入してきた語の出所）が現われているもの（実例(1)）とそうでないもの（実例(2)）とに分類した。

(1)<sup>4)</sup> 「センターによじのぼったセンターの弘田が完全にあきらめました」

（←フェンスによじのぼった）

(2) 「そこのセンヒキとって……」 （←センヌキ）

(1)では、その後に現われるはずであった「センター」が「フェンス」の場所に侵入してきたことは明らかである。この種の誤りは量的に少ないこともあるが、話者の語彙部門の内容を反映しているというよりはむしろ、文生産の過程で語を配列してゆく際に企図の範囲に入っている他の語を代用してしまったために起こる<sup>5)</sup>と考えられるので本論では分析の対象とはしない。一方、(2)タイプの誤りは前後にソースとおぼしき要素が見出せないで語彙部門と直接かかわっている可能性が強く、そこでの語彙の貯蔵のされ方と選択のメカニズムを知る上で重要な情報を与えてくれることが期待される。

### 3.2. 文法的範疇

WSリストの第3項目では意図された語と誤って用いられた語の文法的範疇が調べられている。内容語－文法語の二分法を採用すると、語代用エラーはすべて内容語同士、文法語同士の間で起こっている<sup>6)</sup>ので、リストでは、具体的には品詞の指定が行われている。

意図された語（I）の品詞を縦軸に、誤って用いられた語（E）の品詞を横軸にとった格子表を作成すると以下ようになる。

表 1

I	E	名	動	形・形動	副	計
名 詞		170(79%)	1	1		172
動 詞		3	30(14%)	1	1	35
形・形動		3		3(14%)		6
副 詞					2(1%)	2
計		176	31	5	3	215

表1を見てまず明らかなことは、対角線にあたる部分の数値、すなわち同じ品詞である語同士の誤りの頻度が高いという点である。この傾向は、他の言語、現段階では英語、ドイツ語を対象にして行われた研究<sup>7)</sup>においても指摘されており、普遍の特徴とまで断定できないが、ある程度一般的な傾向ということはいえよう。

このような結果となる理由の1つは、「何を伝えるか」という発話内容と語順という形で現われる言語の構造との間にある平行関係であるように思われる。無標の場合であれば、日本語において節の先頭にくる品詞は名詞が多く、末尾にくるのは動詞が多い、また形容詞の位置も自由ではない、という

ように、節の中の位置によってある程度選ばれる品詞は規定されるので、語代用エラーにおいても同じ品詞の語が選ばれる確率も高くなることは十分考えられる。

もちろん、発話にあたって、語彙部門が走査され語彙が選ばれる際に、品詞という標識が手がかりになる、あるいは語彙部門内で同じ品詞の語は連絡しあう形で貯蔵されていることも原因の1つと考えられる。

次に品詞別にみてゆくと、名詞の頻度が高く全体の80%近くを占め、語代用エラーの中心をなしている。これは、日本語の語彙全体に占める名詞の頻度の高さに対応するものと思われる。

いずれにせよ、語彙部門内での語彙の貯蔵のされ方、あるいは意図にかなった語を選択する操作において、品詞という手がかりが重要な役割を演じていることは間違いなさそうである。

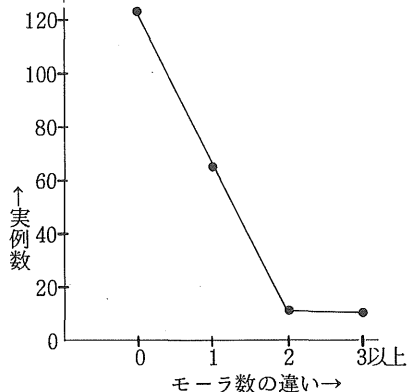
### 3.3. モーラ数

WSリストでは、第4項目のモーラ表記<sup>8)</sup>に併記する形で、第5項目として意図された語と代用された語が何モーラであったかが示されている。

なお、調査の対象とした実例は、前節での結論をふまえて、LとEの品詞が一致している205例とする。結果は以下に示す通りである。

表2.<sup>9)</sup> IとEのモーラ数が

同じ	122
1つ違い	64
2つ違い	11
それ以上	8



また、Fay and Cutler (1978)で報告されている英語の語代用エラーの分析によると、意図した語と代用した語のシラブル数は、両者に意味的な関係がある場合に75%、ない場合は87%と高い一致度を示している。以上の

観察から、語彙部門での語の貯蔵、選択にモーラ数、つまり目標とする語がどれ位長いかという情報も無視できない手がかりを与えているように思われる。

### 3.4. 共通モーラ

WSリスト第6項目では、意図した語と代用した語の間の音声的類似性を計る目安として、両者に共通するモーラが何モーラあったかが記されている。例えば、「天井／te N zjo R／」と言おうとして「屋上／o ku zjo R／」と言ってしまった誤りでは、4モーラ中2モーラが共通しているということで「2」が記されている。今回は予備的な分析として、IとEのモーラ数が同じである、という条件を満たすものだけを分析の対象とした。結果は以下に示す通りである。

表3

	*	2	3	4	5	6
* 横軸はIとEのモーラ数、縦軸は共通するモーラ数を示す。	0	15	17	2	1	1
	1	10	14	2	0	0
	2		11	20	2	1
	3			11	4	2
	4				1	6
	5					2

前述した通り、この表はあくまでも予備的な調査であり、最終的な結論、例えば「共通モーラは語彙選択の手がかりとなっている」等を下すためには次の点が考慮に入れられなければならない。つまり、表3で3モーラ語と4モーラ語を境にして、共通モーラがゼロの頻度に差がみられるのは、共通モーラの差というよりはむしろ、共通形態素の差とも考えられる点である。というのは、本論では複合名詞を1語と教えているので、「内野安打 — 内野フライ」「アブラムシ — アブラカス」のような共通の形態素が引き金となって語代用が起きている実例が4モーラ以上の長さを持つ語では多く見出されるからである。

したがって、本節では「共通するモーラがあった方が語代用エラーは起こりやすく、音声的類似性は語代用エラーに関係がある」という弱い結論を述べるにとどめておく。

### 3.5. アクセント

現在まで、言い誤りと強勢パタンを扱った多くの文献は、セグメントのレベルで誤りが起こっても、語、句の全体としての超セグメント的特徴は維持されるという興味深い指摘をしている。今回筆者の収集した資料もこの指摘にかなりの程度まで支持を与えるものであった。それに関連して、本節では、意図した語と代用した語はどのようなアクセント型を持っていたかを調べてゆく。

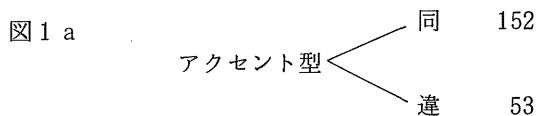
前出 Fay and Cutler (1978)では、I と E に意味的關係のある場合82%、ない場合98%と強勢パタンにおいても高い一致がみられたことが報告されており、超セグメント的特徴も語彙部門において重要な役割を果たしていることが予想される。

筆者が収集した日本語の語代用エラーのIとEのアクセントは、WSリストの第9項目に記されている。記述方法として、1モーラに○印を1つ対応させ、「高」の部分には●、「低」の部分には○を付与するという方法をとった。<sup>10)</sup> なお、アクセントを論ずる場合に、方言との関係は当然考慮に入れられるべきであるが、本論の場合、言い誤りの定義、認定の段階で、方言がかかわっていると思われるものはできる限り排除する方針をとったので、収集された事例のアクセント型はすべて東京方言のアクセント型であると判断して議論をすすめてゆくことにする。<sup>11)</sup> また、基準として、日本放送協会編の「発音アクセント辞典」が採用されている。

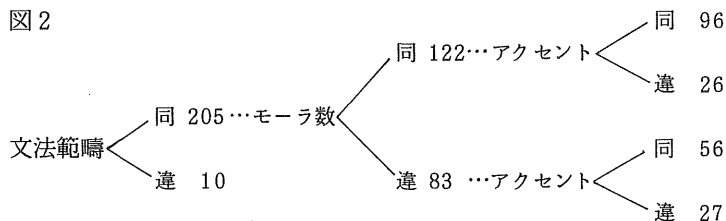
第9項目のアクセント型は、以下の手順で比較された。まず、アクセント核とよばれる「低」への下降点の有無によって、それぞれ起伏式と平板式に分類され、起伏式はさらに、下降点の位置によって、頭高型、中高型、尾高型に分類され、計四つの範疇が決定される。そして、意図した語と代用した語がどの型を持つかによってアクセント型が「同じ」か「違う」かが決められる。具体例は以下の通りである。

- |     |         |         |     |       |
|-----|---------|---------|-----|-------|
| (3) | I : 制度  | ● ○ ○   | 頭 高 | ……「違」 |
|     | E : 政治  | ○ ● ●   | 平 板 |       |
| (4) | I : 出迎え | ○ ● ● ● | 平 板 | ……「同」 |
|     | E : 見送り | ○ ● ● ● | 平 板 |       |

集計した結果は図1 a に示す通りである。



さらに、図 2 は、文法範疇、モーラ数、アクセント型の 3 つの関係を示した樹状図である。



以上の結果から、文法範疇、モーラ数と同様アクセントも、語彙部門内の語の貯蔵と選択の手がかりとなっていると考えられる。

### 3.6. 語頭音・語末音

語彙部門内での語彙の配列方法についての可能性のある仮説の 1 つに、語は文字通り我々が日常使用する辞書のように左から右に音声的に類似した音にしたがって並べられているのではないか、という仮説がある。

確かに、度忘れしてしまってどうしても思い出せない語の最初の音をきいた時に、その語を突然思いつくという経験は誰にでもあろう。本節では、その辞書の見出しにあたる語頭音について、意図した語と代用した語の語頭音の共通性を調べる。また、'Tip of the tongue phenomena' で知られる Brown and McNeil (1966) の提案も考慮に入れ、語末音についても検討を試みる。

WS リスト第 7、8 項目に示されている「同じ '○'」、「違う '×'」を集計すると以下の数値が得られる。

表 4.

I と E の語頭音が同じ……	97 例 (45%)
I と E の語末音が同じ……	55 例 (25%)

半数近くの実例で語頭音が一致している事実は注目してよいかもしれない。

さらに、この数値は Brown and McNeil (1966) の実験結果と一致している点も興味深い。しかし、現段階で評価を行うことは、3.4で述べた形態レベルでの考察の必要性を考えると困難であるといわざるを得ない。また統計的な検定を行う場合でも、理論値が設定しにくいという障害がある。したがって、前述の仮説への結論は未決定にしておく。

#### 4. 意味的、統語的な問題

##### 4.1. 素性による記述

前節では、語代用エラーには、モーラ数、アクセント型などの音的な特徴がかかっていることが明らかにされた。

ここで、以下の実例をみてみよう。

(5) 「ウェディングケーキにハサミを入れる」

(←ナイフ)

(6) 「ラスベガスですごくかせいだ、

じゃなくて損した人」

(7) 「今、そのボール、いやバットを拾って」

(5)では、ナイフとハサミの『何かを切るもの』の類似性の他に「—を入れる」という環境にあてはまる語をとり違えてしまったと考えられるし、<sup>12)</sup>(6)は反意語を代用してしまった例、(7)は同じ野球用語内での近接性のために誤った語を用いてしまった例であると思われる。このような、音的特徴よりむしろ意味的な要因を分析の際に考慮すべき語代用エラーの例は多い。

しかしながら、語代用エラーの意味的側面の記述は今だに多くの問題点を含んでいるといわなければならない。そして、その問題点の多くは、「いかに語彙部門内部での当該語の近接性<sup>13)</sup>を記述するか」という問題に帰着されるように思われる。

Fromkin (1971) では、素性表示という方法が反意語等の語代用エラーの記述に合理的であるという提案がなされている。例えば、'hate' というべきところを、'like' といってしまった誤りでは、素性の束のうち、[±desire] という素性の値だけが交換されたのだ、と記述している。また、日本語の語代用エラーを扱った神尾・外池(1979)でも、語は素性の束となっ



て語彙部門に貯蔵されていると考えれば、一見したところ意味的に両端に位置するかのように見える反意語は、実は1つの素性の〔±〕の値だけが交換されたものとみることができる。そこで、反意語も類義語の一種として語彙部門では近い位置にあること、そのために語代用エラーではしばしば反意語が現われてしまうという説明が与えられている。前述(6)の例では〔±(一定時間後に)金銭を持っている〕という素性のみが異なり、残りの素性は同じである。つまり素性の一致度が高いという典型的な例であろう。

また、素性を用いた表記法のもう一つの有利な点は、必要とあらば統語的な情報も簡潔な形で組み込むことができる、という点である。以下の例をみてもよい。

(8) 「戦争に行っている間、大学いれちゃはいれちゃった……」

(9) 「やっと地面に足をついて、つけてプレーできるようになり」

(8)、(9)では、〔±動詞〕、及び意味素性は共通で〔±自動性、±他動性〕という素性だけが異なるとすれば合理的な説明ができればよい。

しかし、素性表示による記述にも問題がないわけではない。素性による記述を行う場合、記述が煩雑になることを避けるために素性の数と種類を限定する必要があるにもかかわらず、文法理論の内部の意味論研究においても一部の基本的な動詞<sup>14)</sup>を除いてこの問題は克服されていないのが現状である。言語の運用面を扱う意味論研究においては、事態はさらに深刻であるように思われる。以下の実例をみると：

(10) 「子供たちも、お祝い、お礼のことばを言っています」

(11) 「主人公がやせていたらこれは絵、芝居にならない」

(12) 「その一番さか、下に流れている…」

(13) 「誕生日、いやクリスマスのプレゼント」

(14) 「あの一、御仏前に入れる、あの香典袋に入れる」

(10)から(14)はすべて、語自体の意味内容よりも、文脈的((11)：「\_にならない」という決まり文句)、心理的((12)：下に流れる→坂の連想)、日常生活((13)：プレゼントをする日、(14)：香典袋には御仏前と書く、(10)：お祝いされたらお礼を言う)といった言語外の要因が影響している語代用エラーの例である。これらを〔±。。。〕という形で記述することは不可能ではないにしても有意義な記述となるか、となると疑問が残る。この点が素性による記述

の難点であろう。そこで次節では、意味的側面の記述方法のもう一つの候補について論ずる。

#### 4.2. 失語症の研究方法から

本節では、素性による記述の有利な点を認めつつ、中島(1979)等で紹介されている失語症患者の錯語の分析に用いられているいくつかの関係概念の語代用エラーの意味的側面の記述への適用可能性について検討してみたい。

中島(1979)等を参考に、WSリストでは以下に示すような意味的關係概念に基づいた記述が暫定的に採用されている。

- a. 同意語 (例: 以降 — 以上)
- b. 反意語 (損した — 得した)
- c. 同一範疇の等位関係 (テレビ — ラジオ)
- d. 行為 — 結果 (狙撃 — 射殺)
- e. 上下関係 (イカ — サカナ)
- f. 場所の近接性 (ポスト — バー<sup>15)</sup>)
- g. 行為 — 道具 (ゴルフ — クラブ)
- h. 道具 — 行為者 (バット — バッター)

前述の通り、言語の運用面での意味の記述は、文法理論の研究では捨象される言語学外の知識、発話時の状況、専門語・職業語の影響などの要因の絡みを捉えなければならず、その的確な記述は非常に困難である。そこで、本論ではやや消極的ではあるが、上記 a から h の意味的な関係概念が互いに多次的に作用し合い、語彙の意味論でいう意味の「場」という複雑なネットワークを構成している、という結論にかえての報告を述べるにとどめる。問題となっていた(10)から(14)の実例は、WSリストでは

同じ場 ( - - - )

という形で記される。例えば(13)は、

同じ場 (プレゼントをする日)

のように記述されている。この方法は改善とまではいかないまでも、ある程度の幅を持った記述を許し、素性表示よりも簡潔な形で示すことができる。したがって、素性表示では扱いきれない領域を扱う際の方法として用いれば両者は相補的關係のもとでならび立つことになり、より効果的な記述方法へ

の手がかりになるかもしれない。

しかし、この「場」を規定する次元の設定を明確に行わなければならないことは明らかであると同時に、伝統的な語彙の意味論の成果も組み込んでゆくことも含めて、今後に残された重要な課題といえよう。

## 5. 結 論

語代用エラーの記述、分析を行った本論から得られた知見は以下の通りである。

- i) 語代用エラーは、決してランダムに起こるのではなく、高い規則性のもとに生じる。
- ii) 語彙部門を走査し、発話意図にあった語を選択する段階では、文法的範疇、モーラ数（Iの長さ）、アクセント型といった、いわば漠然とした原型が手がかりになっている可能性が強い。（図2参照）
- iii) 意図した語と代用した語の間には語彙的な意味だけでなく、言語外的な意味関係もかかわっている。そのために、素性、場等を用いた有効な記述方法が必要である。

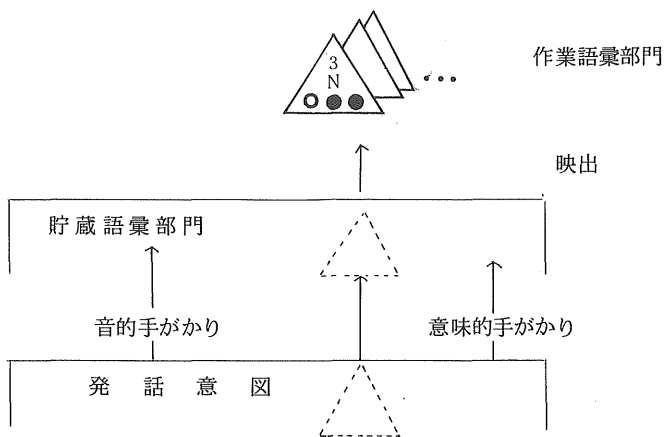
以上の知見を総合して、語彙部門のモデルを考える時、まず明らかなことは、瞬時にして目標の語を選び出せる合理性を持ち、かつ多次元的な構造を有するモデルでなければならないことである。次元が三つまでであれば、この条件を満たすモデルの具体的な形としては、例えばマンセルの表色系のモデルが思い浮かぶが、語彙部門の最適なモデルがはたして類似した構造を持つか否かを調べる手順は現在のところ得られてはいない。

もう一つ重要なことは、語彙部門は発話メカニズムの出発点として、単に語彙を選択するだけでなく、次の基本的段階と考えられる語を配列するレベルに対して有意義な入力を提供しなければならない、という点である。<sup>17)</sup>

以上の点をふまえた上で、筆者は二つの下位レベルを持つ語彙部門を提案する。第1段階として、話者の持つ全知識の表示としての貯蔵語彙部門を想定する。この存在は自明であろう。そこに発話意図に基づいて、文法的範疇、モーラ数、アクセント型等を手がかりとした走査が行われる。第2段階として、意図にふさわしいと思われる語彙が、生成音韻論で提案されている映出

(projection) に似た原理に従って浮かび上り、これからが作業語彙部門ともいうべき豊かな情報量を持った、その発話のためだけの、密度の高い語彙部門の構成要素となるのである。この様な2段階を持った語彙部門が現在のところ最も妥当であると思われる。語代用エラーの中で、本論で扱ったような誤りは第1段階の走査の誤りの反映であり、3.1.で触れたソースのある語代用エラーは第2段階の語彙部門のいわば整備の誤りであると考えられる。この2段階語彙部門仮説を図示すると以下ようになる。

次の段階へ



## 注

- 1) 本論では「言い誤り」とはごく概略的に「故意にではない発話の意図からの逸脱」と定義する。言い誤りには様々なタイプ（交換、混合、付加、欠落、代用等）があり、様々な言語学的レベルにおいて起こることが報告されている。Fronmkin (1973) 等参照。
- 2) Garrett (1975) のモデルを参照。
- 3) 言い誤りを扱った文献の中には、実験的に誤りを誘出する方法をとっているものもある。Motley (1980) 等参照。
- 4) ・ ・ ・ は誤りが起こった箇所、 ° ° ° はその誤りの出発点となった箇所、( ← ) は話者の意図をそれぞれ示したものである。なお、実例の一部は、紙数の許す限りで本論末に記した。
- 5) 文企図の単位 (Sentence planning unit) を探る上では興味深い誤りである。
- 6) 内容語と文法語の代用は皆無であった。また、本論では文法語同士、例えば助詞の誤りは扱わない。助詞の誤りについては寺尾 (1983) 等を参照。
- 7) Fay & Cutler (1978), Hotoph (1980) 参照。
- 8) 本論ではアクセント表記の関係もあり、記述は基本的にモーラ表記を採用した。
- 9) 表 2 の数値、同 (122) — 違 (83) を  $\chi^2$  検定すると、 $P < .01$  で有意であった。
- 10) 東京方言のアクセント記述として、「高」「低」の 2 段階で記述した。また、語の複合によってアクセント型が変化する場合には、次に示すように「-」を用いて表記した。  
「市長選 (○・○・-) cf. 市長 (・○○)」
- 11) この理想化は、それ自体興味深い問題を含んでいる。例えば、地方出身者で、東京方言を話さなければならない圧力の中にいる人の語彙部門ではアクセントはどのように表示されているか、等は今後の課題として価値を持つように思われる。
- 12) 例えば、セレモニーでのテープカットは「テープにハサミを入れる」と

なる。

- 13) 既に1900年にMeringerは、反意語の語代用エラーについて、『それらの語はそもそもはじめから連合して言語意識の中に存在し、また密に近接しているのだと全く間違っただけで口にされやすい（懸田他訳 Freud (1901)』と述べている。
- 14) Jackendoff (1976) の方法を参照。
- 15) サッカーのゴールなどで。
- 16) 例えば、今世紀前半のドイツで盛んに研究された「場の理論」は示唆するところが大きいかもしれない。
- 17) 3.1.で触れた、ソースのある語代用エラーのIとEも、ソースなしの場合とはほぼ同じ傾向を示しており、配列部門への入力に語彙部門が強いかわかりを持っていることをうかがわせる。

#### 参 考 文 献

- 神尾昭雄、外地滋生（1979）「言い間違いの言語学」、『言語障害と言語理論』、pp. 271-308、今井邦彦（編）、大修館。
- 城生伯太郎（1982）『音声学』、アポロン音楽工業株式会社。
- 寺尾 康（1983）「発話のメカニズムについて—自然発話における言い誤りを資料として—」、修士論文、筑波大学。
- （1984）「混合タイプの言い誤りについて」、『言語学論叢』、筑波大学一般・応用言語学研究室。
- 中島平三（1979）「言語理論と言語障害」、『言語障害と言語理論』、pp. 135-216、今井邦彦（編）、大修館。
- Freud, S. 著、懸田克躬、池見西次郎他訳、『フロイト著作集 4』、人文書院。
- Brown, R. and D. McNeill (1966) “Tip of the tongue phenomenon.” *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, 5 (4).
- Fay, D. A. and Cutler, A. (1977) “Malapropisms and the

- structure of the mental lexicon." *Linguistic Inquiry*, 8, 505-520.
- Fromkin, V. A. (1971) The non-anomalous nature of anomalous utterances. *Language*, 47. 27-52.
- (ed.) (1973) *Speech Errors as Linguistic Evidence*. The Hague : Mouton.
- Garrett, M. F. (1975) The analysis of sentence production. In G. Bower (ed.) *The Psychology of Learning and Motivation*. Vol. 9., Academic Press.
- Hotopf, W. H. N. (1980) Semantic similarity as a factor in whole-word slip of the tongue. In V. A. Fromkin (ed.) *Errors in Linguistic Performance : Slips of the Tongue, Ear, Pen, and Hand*. Academic Press.
- Jackendoff (1976) Toward an explanatory semantic interpretation. In *Linguistic Inquiry*, vol. 7, No. 1.
- Motley, M. T. (1980) Verification of "Freudian slips" and semantic prearticulatory editing via laboratory-induced spoonerisms. In V. A. Fromkin (ed.), *Errors in Linguistic Performance : Slips of the Tongue, Ear, Pen, and Hand*. Academic Press.

付 録 1

I		E	
息	—	空	気
昔	—	む	こ う
ミ	ミ	ズ	— ネ
口	紅	—	唇
花	嫁	—	花
お	母	さん	— 先
さ	い	わ	い
く	ず	箱	— ご
字	体	—	筆
足	—	く	つ
つ	な	ぐ	— つ
電	車	—	電
バー	デー	—	バン
音	楽	—	テ
カタ	カナ	—	カタ
サイ	フォン	—	サー
オ	ケ	ラ	— オ
ダイ	ヤル	—	受

I		E	
誘	拐	—	誘
食	用	—	主
ハ	ナ	—	ハ
ツ	ユ	—	フ
ボ	ケ	ツ	— ボ
確	率	—	確
ト	ラ	ン	プ
滋	賀	—	静
車	—	駐	車
ブラウ	ン	管	— 真
す	い	て	い
ク	ラ	ブ	— ゴ
冬	至	—	夏
と	き	—	こ
反	省	—	反
土	砂	—	道
危	険	—	重
言	語	—	英
⋮			⋮



	実 例	I / E	文法 範 疇	モーラ (音素) 表記	モーラ 数
1727	一ということが新石器時代と 新石器文化と旧石器文化	新石器) 文化	N	bu N ka	3
		新石器) 時代	N	zi da i	3
1726	日本語がじょうぶつ、じょう ずにならないんですよ	じょうず	AN	zjo R zu	3
		じょうぶつ	N	zjo R bu cu	4
1724	ゲームは第2コーナ <sup>・</sup> に入って ジュツの攻撃	クォーター	N	ku o R ta R	5
		コーナー	N	Ko R na R	4
1723	ボールゾーンからボールになって いくフォアボ <sup>・</sup> (ル)フォークボール	フォークボール	N	ho R ku bo R ru	6
		フォアボール	N	ho a bo R ru	5
1722	海で使いますとね、レンズ交換 のときに砂が入っちゃう	フィルム	N	hi ru mu	3
		レンズ	N	re N zu	3
2187	水がなきやのめないだっけ、 あ、くえないだっけ	くえない	V	ku e-nai	2
		のめない	V	no me-nai	2
2188	2本 <sup>・</sup> め、2つめの三振をとり ましてスリーアウト	2つ	N	hu ta cu	3
		2本	N	ni ho N	3
2191	これでゲ <sup>・</sup> ムあったかかみえ ましたが	勝負	N	sjo R bu	3
		ゲーム	N	ge R mu	3
2218	より多くの方にドク <sup>・</sup> シャを、ドク ショを楽しんでいただきたい	読書	N	do ku sjo	3
		読者	N	do ku sja	3
2200	「何も考えない無 <sup>・</sup> 知の境地に なりました」	無我	N	mu ga	2
		無知	N	mu ci	2
2199	間もなくプレ <sup>・</sup> イボー <sup>・</sup> イ	プレイボール	N	pu re i bo R ru	6
		プレイボーイ	N	pu re i bo R i	6
2223	セカンドランナー羽田ホームイン 近鉄逆転へ	(オ-ル)パシフィック	N	pa si hi Q ku	5
		近鉄	N	ki N te tu	4
2222	もう一人はデ <sup>・</sup> ッドボ <sup>・</sup> ールを選 んで塁に出ています	フォアボール	N	ho a bo R ru	5
		デッドボール	N	de Q do bo R ru	6

共通	頭	末	アクセント型	意味的關係	メ	モ
0	×	×	—●○○ —●○○	歴史解説には必要な語 新石器——という共通語		
2	○	×	●●● ●○○○	意味関係考えられない じょう——u という共通項		
2	×	(×)	○○○○○ ●○○○		O+R+O+Rの音的環境。 第2——の影響	
4	○	○	○○●○○○ ○○●○○○	同じ場(野球・投球) ToT効果も		
0	×	×	●○○ ○○●	同じ場(カメラ関係)	その前にレンズ掃除の話 をしていた。	
0	×	×	○● <sup>ナイ</sup> ○●—	「のむ」「くう」意味的類似	「水」—「のむ」のイメ ージ。	
0	×	×	○○●● ○○●●	両方とも野球に関係ある単位 ヒット(ホームラン)一本 三振— <sup>1つ</sup> <sub>2つ</sub>		
0	×	×	●○○ ●○○		「勝負あった」「ゲーム セットの fusion	
2	○	×	●○○ ●○○	意味的類似(行為—行為者)		
1	○	×	●○ ●○	無——による文脈効果		
5	○	×	○○●●○○ ○○●●○○	意味関係なし	音声面の著しい類似	
0	×	×	○○●○○ ○○●●●	同じ場の上下範疇	羽田は近鉄の選手	
3	×	○	○○●○○ ○○●●○○	同じ場(野球用語) ——ボールという共通項		

# Word substitution errors and the structure of the mental lexicon

Yasushi Terao

The purpose of this paper is to explore the structure of the mental lexicon, using 216 Japanese word substitution errors (whole word slip of the tongue) collected by the author. These errors have some interesting properties. By comparing the intended word with the error word, the conclusions obtained are as follows:

1. The intended word and error word are of the same grammatical category in 95% of the cases.
2. They almost always have same accent pattern (74% agreement) and the same number of moras (60% agreement)
3. An initial sound may be important to lexical storage.
4. To describe the pragmatic factors as well as the semantic factors, the way of description based on both feature and field theory must be developed.
5. Mental lexicon provides an information as a input to next stage of the sentence production mechanism.

Given these facts, the author will propose the model of the mental lexicon with two stages. First, in the permanent lexicon, words are arranged by multi-dimensional structure, such as grammatical category, accent pattern, number of moras, initial sound, etc. Second, in the working lexicon triggered by the intention of the utterance, words that are appropriate to the intention are selected. Working lexicon is the input to the next stage of the sentence production mechanism.